中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第 8 巻 第 2 号（2009）9 ― 16 頁

動的母子画の試み
―― 動的母子画と母子画の比較 ――

中京大学心理学部　馬場　史津[注]

Kinetic mother-and-child drawings

BABA, Shizu（School of Psychology, Chukyo University）

The present study compared mother-and-child drawings with kinetic mother-and-child drawings. University students were instructed to "draw a mother and child" (mother-and-child drawing) and "draw a mother and child doing activities together" (kinetic mother-and-child drawing). The most important difference between the drawings resulting from the two different instructions was "body touch" between the mother and child figures. Kinetic mother-and-child drawings had fewer depictions of "body touch" between mother and child figures than mother-and-child drawings. The question we must consider here is the meaning that "body touch" expresses in these drawings. To answer this question, an attachment style questionnaire for adults was used to clarify the meaning of "non-body touch". Low-secure group and high-secure group were extracted from the questionnaire. Compared with the low-secure group, the figures drawn by the high-secure group were more often smiling. Smiling figures in the mother-and-child drawings made by the high-secure group were determined to represent an emotional bond. In comparison with "facial expression", "body touch" is an objective index (an objective index is required for the interpretation of drawings). The results of the present study demonstrated that "body touch" is not a clear index in kinetic mother-and-child drawing.

Key words: kinetic mother-and-child drawings, mother-and-child drawings, object relation, internal working model

Ⅰ　はじめに

アメリカの臨床心理学者 Gillespie（1989）により考案された母子画は，「お母さんと子どもの絵を描いてください」と教示する描画法で，描かれた母子の有り様から描き手の対象関係を理解しようとするものである。Gillespie は 1994 年に *The projective use of mother and child drawings. A manual for clinicians.* を出版しているが，そこには母子画の有用性は叙述されているものの，母子画の数量的研究はほとんど示されていなかった。そこで筆者は母子画の一般的反応様式の調査や成人版愛着スタイル尺度を用いた解釈仮説の検討，母子画による見立ての試み，精神障害者・非行少年の調査等を実施し，大学生では笑顔で手をつなぐ姿の母子画が標準的であり，臨床例や非行少年では身体接触のない母子画が多く描かれることから，母子像の身体接触の重要性を提示してきた（馬場，1997；2001；2002；2003；2005；2008）。

複数の人物像の関係性に注目しようとして考案された家族画テストは，記念写真的で相互作用のないものが多かったという経験から，Burns & Kaufman（1972）により描画に運動を加えた動的家族画へと発展した。彼らは描画に運動を加えることにより情報量が増加し，より意義ある知見が得られると考えたのである。つまり母子画にも動的要素が加味されれば，母子の関係性がさらに豊かに表現され，被検者をより理解することができるのではないかと考えられる。そこで本研究では「お母さんと子どもが何かしているところを描いてください」と教示する動的母子画を実施し，母子画と比較・検討することを目的とする。

Ⅱ　方法

動的母子画は学生 136 名（男性 44 名，女性 92 名）を対象に集団法で実施した。3B の鉛筆と横向きの A4 版白紙を配布して「お母さんと子どもが何かし

注　babashiz@lets.chukyo-u.ac.jp

ているところを描いてください」と教示した。また詫摩・戸田（1988）による成人版愛着スタイル尺度も同時に実施した。

動的母子画は『子ども像の数』『母子像の種類』『形態』『サイズ』『表情』『身体接触』『アイコンタクト』の描画指標と『子ども像の性別』『子ども像の年齢』『母子の行為』についての描画後の質問（以下 PDI 指標とする）の出現頻度を算出し，学生 597 名（男性 179 名，女性 418 名）の母子画と比較した。

Ⅲ　結果

今回の動的母子画では，3 名が複数の子ども像を描いた。複数の子ども像が描かれた絵は関係性が複雑になるため，今回は単数の子ども像を描いた 133 名の描画を分析の対象とした。母子画は以前の調査データを利用し，単数の子ども像を描いた学生 570 名の描画と比較した。

1．標準タイプの比較

標準タイプの研究は，出現頻度の多い母子画の表現型を確認することで，母子画解釈の着眼点を明らかにしようとする試みである。出現率 50%以上の表現型を標準タイプとして，母子画と動的母子画の標準タイプを比較した。

1−1　描画指標

『母子像の種類』:〔人間〕と〔動物・抽象的表現〕の表現型に分類されるが，動的母子画においても〔動物・抽象的表現〕は 1 名に出現したのみであった。

『形態』:〔全身〕〔半身〕〔顔〕〔隠れている〕の表現型に分類した。表 1 に示したように母親像の『形態』は動的母子画でも〔全身〕が 80%以上を占め，標準タイプであることが示された。子ども像も同様の結果であった。『形態』について χ^2 検定の結果，出現頻度に有意な偏りがみられた（母親像；$\chi^2=21.26$, df＝3, $p<.001$／子ども像；$\chi^2=19.86$, df＝3, $p<.001$）。残差分析をおこなったところ，どちらの像も動的母子画は母子画に比べ〔隠れている〕が多かった。

『サイズ』:〔小さい〕〔普通〕〔大きい〕に分類した。『形態』の表現型が〔隠れている〕の場合は『サイズ』の分類から除外した。動的母子画においても〔普通〕が 50%を超えて標準タイプであるが，子ども像の場合は，〔小さい〕も 44.9%出現した（表 2 参照）。χ^2 検定の結果，出現頻度に有意な偏

表 1 『形態』の比較

		全身	半身	顔	隠れている
母親像	動的母子画	108（81.2%）	1（8.3%）	3（2.3%）	11（8.3%）
	母子画	469（82.3%）	7（12.3%）	23（4.0%）	8（1.4%）
子ども像	動的母子画	108（81.2%）	8（6.0%）	2（1.5%）	15（11.3%）
	母子画	500（87.7%）	32（5.6%）	22（3.9%）	16（2.8%）

表 2 『サイズ』の比較

		小さい	普通	大きい
母親像	動的母子画	45（36.9%）	73（59.8%）	4（3.3%）
	母子画	30（5.4%）	432（78.1%）	91（16.5%）
子ども像	動的母子画	53（44.9%）	63（53.4%）	2（1.7%）
	母子画	89（16.0%）	419（75.8%）	45（8.2%）

表 3 『表情』の比較

		笑顔	非笑顔	後ろ姿	空白の顔
母親像	動的母子画	76（57.1%）	16（12.0%）	4（3.0%）	37（27.8%）
	母子画	395（69.3%）	90（15.8%）	17（3.0%）	68（11.9%）
子ども像	動的母子画	70（52.6%）	19（14.3%）	5（3.8%）	39（29.3%）
	母子画	351（61.5%）	130（22.8%）	20（3.5%）	69（12.1%）

りがみられ（母親像；χ^2＝105.63, df＝2, p＜.001／子ども像；χ^2＝50.56, df＝2, p＜.001），母子ともに動的母子画は母子画に比べ，〔小さい〕が多く〔普通〕〔大きい〕が少ないことが示された。

『表情』：〔笑顔〕〔非笑顔〕〔後ろ姿〕〔空白の顔〕に分類した。〔非笑顔〕には無表情といえるようなものと，感情の入り混じった複雑な表情がみられた。実際の解釈においては，そういった表情をどのように解釈するかが大きなポイントとなるが，出現頻度は少なく，そのため統計的には〔非笑顔〕として分類した。

動的母子画においても〔笑顔〕が標準タイプであるものの，〔空白の顔〕が約3割を占める結果となった（表3参照）。χ^2検定の結果，出現頻度に有意な偏りがみられ（母親像；χ^2＝21.62, df＝3, p＜.001／子ども像；χ^2＝25.97, df＝3, p＜.001），両像ともに動的母子画では〔空白の顔〕が多く，母親像では〔笑顔〕が少ないのに対し，子ども像では〔非笑顔〕が少ないことが示された。

『身体接触』：〔抱く〕〔手をつなぐ〕〔子からの接触〕〔非接触〕に分類した。動的母子画では50%を超える標準タイプとなる表現型はみられなかった。χ^2検定の結果，有意な偏りがみられ（χ^2＝31.62, df＝3, p＜.001），動的母子画は母子画に比べ〔非接触〕が多く，〔手をつなぐ〕が少ないことが示された（表4参照）。

『アイコンタクト』：〔母親と子どもが見つめ合う；母⇔子〕〔母親が子どもを見ている；母⇒子〕〔子どもが母親を見ている；子⇒母〕〔アイコンタクトなし；なし〕に分類した。動的母子画では〔なし〕が78.9%を占め，標準タイプであることが示された。χ^2検定の結果，有意な偏りがみられた（χ^2＝18.44, df＝3, p＜.001）。表5に示したように，動的母子画では〔なし〕が多く，〔母⇔子〕と〔母⇒子〕が少なかった。

1－2　PDI指標

『子ども像の性別』：子ども像の性別は被検者の判断にまかされている。そこで描画後に「あなたの描いた子どもは男の子ですか，女の子ですか」と質問し，アンケート用紙に記入させた。その結果，動的母子画でも同性像が標準タイプであった（表6参照）。

『子ども像の年齢』：2歳未満を〔乳児〕，2歳から6歳を〔幼児〕，7歳から12歳を〔児童〕，13歳以上を〔思春期・青年期〕と分類した。動的母子画においても〔幼児〕が標準タイプであり，動的母子画

表4 『身体接触』の比較

	接触			非接触
	抱く	手をつなぐ	子からの接触	
動的母子画	21（15.8%）	51（38.3%）	1（0.8%）	60（45.1%）
母子画	130（22.8%）	313（54.9%）	5（0.9%）	122（21.4%）

表5 『アイコンタクト』の比較

	母⇔子	母⇒子	子⇒母	なし
動的母子画	15（11.3%）	8（6.0%）	5（3.8%）	105（78.9%）
母子画	121（21.2%）	79（13.9%）	33（5.8%）	337（59.1%）

表6 『子ども像の性別』の比較

	同性	異性
動的母子画	92（70.2%）	39（29.8%）
母子画	404（71.0%）	165（29.0%）

表7 『子ども像の年齢』の比較

	乳児	幼児	児童	思春期・青年期
動的母子画	14（10.5%）	94（70.7%）	20（15.0%）	5（3.8%）
母子画	95（16.7%）	364（63.9%）	101（17.7%）	10（1.8%）

と母子画の出現頻度に偏りはみられなかった（表 7 参照）。

『母子の行為』：どのような場面が絵に描かれたのかを理解するため，「あなたの描いた親子は何をしていますか」と質問し，自由に記述させた。表 8 に出現頻度の多かった行為を示した。母子画では〔買い物に行く〕が最も多く 24.6%を占めたのに対して，動的母子画では〔遊んでいる〕が最も多く出現率は 27.8%であった。

2.『身体接触』と成人版愛着スタイル尺度

動的母子画と母子画では『身体接触』の意味が異なる可能性が考えられた。そこで，動的母子画の『身体接触』の表現型と成人版愛着スタイル尺度との関連を調べることとした。

詫摩・戸田（1988）による成人版愛着スタイル尺度（以下愛着尺度とする）は 3 つの因子から構成されており，安定因子は「私はわりあいにたやすく人と親しくなるほうだと思う」「私は人より知り合いができやすい方だ」などの項目からなり，安定因子の項目を合計した安定得点の高さは，他者への信頼感や人とかかわるときに相互依存的・親和的な心地よい関係を築けるだろうという内的作業モデルが存在すること意味する。また，不安因子は「私は自分を信用できないことがよくある」などの項目が含まれ，不安得点の高さは自他を信用できない存在として捉える内的作業モデルと関連がある。「人に頼るのは好きではない」などからなる回避因子の高さは，他者との関係を回避するような内的作業モデルが成立していることを意味するとされている。

ここでは愛着尺度に不備のみられた 10 名を除外し 126 名を対象としたが，『身体接触』の〔子からの接触〕を描いた被検者は 1 名のみのため除外した。〔抱く〕〔手をつなぐ〕〔非接触〕の表現型を描いた被検者をそれぞれ群として，安定得点，不安得点，回避得点の平均値について分散分析を用いて比較した。その結果，安定得点で有意傾向がみられた。そこで〔抱く〕〔手をつなぐ〕をまとめて〔接触〕群とし，〔非接触〕群と t 検定を用いて比較した。その結果，表 9 に示したように，安定得点において〔接触〕群が〔非接触〕群に比べて有意に高かった（$t_{(121)}=2.08$, $p<.05$）。

また，今回の調査では〔非接触〕がほぼ半数を占めたという結果から，〔非接触〕群には，基本的に問題のない被検者と注意の必要な被検者が含まれているという仮説を立て，接触がなくても安定得点が高い上位 25%を〔非接触・安定高〕群，安定得点の低い下位 25%を〔非接触・安定低〕群として，それぞれの描画指標の特徴を調べた。

人数が少なく統計的検討はできなかったが，表 10 に示したように〔非接触・安定高〕群では〔笑顔〕の表情の母子を描く被検者が 75%を占めたのに対し，〔非接触・安定低〕群では〔笑顔〕とほぼ同数の出現率で〔非笑顔〕や〔空白の顔〕がみられた。

表 8 『母子の行為』の比較

	動的母子画	母子画
遊んでいる	35（27.8%）	27（4.7%）
買い物に行く	18（14.3%）	140（24.6%）
手をつないでいる	15（11.9%）	69（12.1%）
散歩	14（11.1%）	70（12.3%）
どこかに出かける	14（11.1%）	65（11.4%）

表 9　愛着尺度の比較

	接触（N＝69）	非接触（N＝53）
安定得点	25.1（5.38）	23.1（4.66）
不安得点	24.0（5.65）	25.0（5.18）
回避得点	18.1（5.11）	19.5（5.72）

数値は平均値，（　）内は標準偏差

表 10　非接触・安定高群と非接触・安定低群の『表情』の比較

		笑顔	非笑顔	空白の顔
母親像	安定高群（N=12）	9（75.0%）	0（0.0%）	3（25.0%）
	安定低群（N=16）	6（37.5%）	5（31.3%）	5（31.0%）
子ども像	安定高群（N=12）	9（75.0%）	0（0.0%）	3（25.0%）
	安定低群（N=16）	6（37.5%）	5（31.3%）	5（31.3%）

Ⅳ　考察

1．標準タイプの比較

母子画では出現率50%以上の表現型を標準タイプとした結果，図1に示したような，母子は全身でサイズは普通，アイコンタクトはなく笑顔の表情で手をつなぐ絵が大学生における母子画の一般的表現であることが明らかにされている（馬場，2005）。

今回の動的母子画においても『子ども像の数』や『母子像の種類』では，〔複数〕の子ども像や〔動物・抽象的表現〕の出現率は少なく，母子画と同様の傾向がみられた。

また，『形態』は〔全身〕，『サイズ』は〔普通〕が標準タイプであったが，『形態』では〔隠れている〕が母子画よりも多く，子ども像の『サイズ』は〔小さい〕が44.9%を占める結果となった。これらのことは，動的母子画と母子画の『母子の行為』の違いが影響していると思われる。表8に示したように，動的母子画で最も多かった『母子の行為』は〔遊んでいる〕であり，母子画では4.7%しか出現しないものであった。「お母さんと子どもが何かしているところを描いてください」という動きを含んだ教示では，〔遊んでいる〕場面が最も想起されやすいということは納得できるものであろう。母子画で最も多かった〔買い物に行く〕絵では，手にスーパーの袋を提げて歩いている姿が多かったが，動的母子画の〔遊んでいる〕には，積み木や机などの付属物や背景を描く場合がみられた（図2参照）。そのため相対的に人物像そのものが小さく，隠れて描かれることが増えたのではないかと推測できる。さらに，PDI指標の『子ども像の年齢』とも関連するが，描かれる子どもは〔幼児〕が圧倒的に多いため，床に座って遊ぶ姿になりやすい。そのため立った姿で描かれる〔買い物に行く〕場合よりも小さくなりやすい。動きを含んだ教示を与えることにより，想起される場面が母子画とは異なり，描画指標の出現頻度にも影響を与えたと考えられる。

『表情』では，動的母子画も〔笑顔〕が標準タイプであるものの，母子像ともに〔空白の顔〕が多く，母親像では〔笑顔〕が少なく，子ども像では〔非笑顔〕が少なかった。表情が省略された〔空白の顔〕は，自分の感情を表現することに対する防衛的な姿勢を表すといわれている（高橋・高橋，1991）。「何かしているところ」を描かせることにより，母子の関係性がより明確になると予想されたが，逆に感情を含めた関係性を描くことへの抵抗が生じやすいのかもしれない。

動的母子画と母子画の標準タイプで大きく異なったのは『身体接触』であった。母子画では〔手をつなぐ〕が標準タイプであり，身体接触が基本的信頼感のサインとして大きな意味を持つと考えられているが，動的母子画では50%を超える表現型はみられず，〔非接触〕が半数近くを占めるという結果であった。この結果には，動的母子画では〔遊んでいる〕場面が描かれやすいということが影響していると思われる。〔遊んでいる〕にはじゃんけんや積み木，砂場遊び，絵本を読む，バトミントンなどの行為が含まれる。じゃんけんや積み木で遊んでいる状況では，母子の身体接触は生じ難く，その結果，動的母子画には〔非接触〕が多かったのではないかと考えられる。動的母子画において〔非接触〕が最も多い表現であるという結果は，母子画とは異なる『身体接触』の解釈仮説が必要になることを意味している。この点については愛着尺度との関連から考察したい。

動的母子画の『アイコンタクト』は母子画よりもさらに少なく，アイコンタクトを描かないことが標

図1　標準的な母子画

図2　動的母子画〔遊んでいる〕

準タイプであった。母子画におけるアイコンタクトは母子の濃密な関係性をうかがわせる指標である。しかしながら母子が〔遊んでいる〕場面が描かれやすい動的母子画では，アイコンタクトだけでなく，一緒に何かを見ているような共同注視が描かれるかどうかといった視点からの分類も必要であろう。

以上のように，動的母子画では身体接触やアイコンタクトといった心の絆・心の交流を象徴すると考えられていた表現が少ないことが明らかになり，母子の関係性をどのように読み取るのか，新たな視点が必要だと思われた。

２.『身体接触』と成人版愛着スタイル尺度

動的母子画における『身体接触』の意味を明らかにするため，〔接触〕群と〔非接触〕群の愛着尺度を比較した。その結果，〔接触〕群は〔非接触〕群に比べて安定得点が高いことが示された。これは，母子画と同様に，動的母子画においても身体接触を描くことが他者への信頼感や相互依存的・親和的な心地よい関係を期待する内的作業モデルの存在を示す表現であるといえる。しかしながら，動的母子画では〔非接触〕がほぼ標準的な表現であり，『身体接触』を解釈の着眼点にすることは難しいと考えられた。

そこで本研究では，接触はないが安定得点の高い〔非接触・安定高〕群と安定得点の低い〔非接触・安定低〕群を比較することにより，動的母子画の表現の違いを検討することにした。その結果，〔非接触〕でも安定得点の高い群は，〔笑顔〕の表情の母子を描くことが多く〔非笑顔〕を描くことはなかった。一方，安定得点の低い群には〔非笑顔〕や〔空白の顔〕が〔笑顔〕と同様の出現率でみられた。つまり，前者は母子の間に身体接触がなくても，２人の笑顔が母子の絆，ポジティブな関係を表現している場合が多いが，後者は身体的にも表情としても，母子の関係性が希薄な絵を描くと考えられた。

図３は〔非接触・安定高〕群の動的母子画である。母親と子どもがじゃんけんをしているところで，母親は「しまった，勝ってしまった」と思い，子どもは「何も考えていない」と説明された。この絵では母子の間に身体接触はないものの，被検者の内的世界に楽しい体験として母親（重要な他者）のイメージが存在しているのではないか，その象徴として笑顔のじゃんけん，心の交流が描かれたのではないかと考えられた。

一方，図４は〔非接触・安定低〕群の例である。母子の行為は「買い物おわりで家に帰るところ」で，母親は「さっさと来ればいいのにと思っている」子

図３〔非接触・安定高〕群の例

図４〔非接触・安定低〕群の例①

図５〔非接触・安定低〕群の例②

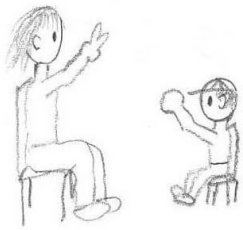

図６〔非接触・安定低〕群の例③

図７〔非接触・安定低〕群の例④

図８〔非接触・安定低〕群の例⑤

どもは「お母さんが怒っていると思っている」と記入された。この被検者は安定得点が非常に低く，さらに不安得点も高い例で，直接的に不安定な関係性が表現されたのではないかと思われる。

図5，図6もまた〔非接触・安定低〕群の例である。図5は「積み木で遊んでいる」ところで母親は「子どもの喜ぶところがみたい」と考え，子どもは「積み木に夢中」と回答した。図6は「じゃんけん」で，母親は「チョキを出せは勝てる」，子どもは「グーを出せば勝てる」と考えている。この2つの例は，母親と子どもが積み木やじゃんけんで遊んでいるが，〔非接触・安定高〕群の図3で描かれたじゃんけんとは異なった印象を与える。〔非接触・安定高〕群では，2人の間に身体接触がなくても，表情やPDI指標から2人でいることの楽しさが表現されているが，〔非接触・安定低〕群の絵からはそういったものが感じられない。動的母子画の解釈では，母子の身体接触がなく，表情にも笑顔がない場合，被検者の基本的信頼感や対人関係のイメージに問題がないか，注意する必要があると考えられた。

しかしながら，母子の表情だけで区別することができない場合もあり，〔非接触・安定低〕群の中にも笑顔の母子像を描いている被検者が約4割出現したことは看過できない。図7はその1例で，母子の行為は「積み木で遊んでいるところ」，母親は「子どもの積み木がうまくできるといいなあ」と考えており，子どもは「お母さんとの積み木は楽しいな」と考えている。この被検者の愛着尺度は安定得点が低いだけでなく，不安得点や回避得点も高い例であり，母子画だけではそのことが理解できない例であった。

また，図8も「お母さんが子どもに絵本を読んでいるところ」で，母親は「子どもが楽しんでくれるように読もうと考えている」，子どもは「絵本を読んでもらうのは楽しい」と回答した。この絵は漫画のちびまるこちゃんと母親のキャラクターによく似ている。この被検者の安定得点はそれほど低くはないが，不安得点はかなり高い得点を示していた。この2例に共通していたのは，安定得点が低く，不安得点が高いという特徴で，心地よい関係が期待できず，自他を信用できない存在として捉える被検者が理想像を描いた例だと考えることができるかもしれない。

V　おわりに

本研究から動的母子画の解釈においては，必ずしも母子画と同じ解釈仮説が適用できないことが明らかにされた。今回の調査は，母子画と動的母子画の被検者が異なったが，同一被検者に母子画と動的母子画を実施した場合にはどのような違いがあるのか，また動的母子画を臨床的に利用するためには，臨床群の特徴を調べる必要がある。

家族画研究で高橋（1985）は，教示に故意に動的要素を指示しなくても，半数程度の被検者がなんらかの動作を伴った人物像を描くと報告しており，動作を伴うか否かも解釈の手がかりになると述べている。また，武田（1992）も女子の非行少年の家族画に動きのあるタイプが3割以上みられたと報告している。母子画の正面を向いて手をつなぐ母子にはあまり動きを感じない。しかし，そこには手をつなぐという動作がすでに含まれているともいえるだろう。

動的母子画では『表情』などから2人の関係性を読み取ることが中心になると予想される。一方，母子画では『表情』も重要な指標であるが『身体接触』が大きなポイントとなる。『表情』に比べて『身体接触』の〔接触〕〔非接触〕は検査者の主観が混じらない客観的な指標である。母子画の場合には，動的母子画へと発展させることで客観的指標の1つが意味をなさなくなる可能性がある。母子画は「お母さんと子どもの絵を描いてください」の教示で実施し，そこで何らかの動きを含んだ絵を描くのか否か，いかに2人を関係づけるのかに注目することが被検者の理解につながると考えられた。

引用文献

馬場史津　1997　Mother and Child Drawingsの基礎的研究　社会精神医学研究所紀要，26，30-36.

馬場史津　2001　母子画（Mother and Child Drawings）の臨床的活用（1）―描画による見立ての試み―　文教大学臨床相談所紀要，5，17-25.

馬場史津　2002　母子画（Mother and Child Drawings）の臨床的活用（2）―上半身（顔と肩まで）の母子画を描いた事例―　文教大学臨床相談所紀要，6，7-12.

馬場史津　2003　母子画の基礎的研究　―成人版愛着スタイル尺度との関係から―　臨床描画研究，18，110-124.

馬場史津　2005　母子画の基礎的・臨床的研究　北大路書房

馬場史津　2008　母子画による心理療法過程のアセス

メント　―3 枚の母子画の比較　臨床描画研究，23，196-211.
Burns, R.C. & Kaufman, S.H.　1972　Action, Styles and symbols in kinetic family drawings (K-F-D): An interpretative manual. NewYork: Brunner / Mazel.　加藤孝正・伊倉日出一・久保義和（訳）1975　子どもの家族画診断　黎明書房
Gillespie, J.　1989　Object relations as observed in projective Mother-and-Child Drawings. *The art in psychotherapy*, 16，163-170
Gillespie, J.　1994　The projective use of Mother-and-Child-Drawings. A manual for clinicians. Brunner / Mazel.　松下恵美子・石川 元（訳）2001　母子画の臨床応用―対象関係論と自己心理学―　金剛出版
高橋雅春・高橋依子　1991　人物画テスト　文教書院
高橋依子　1985　青年に施行した家族画テスト　嵯峨美術短期大学紀要 11　62-71
詫摩武俊・戸田弘二　1988　愛着理論からみた成人の対人態度　―成人版愛着スタイル尺度作成の試み―　東京都立大学人文学報 196　1-16
武田繁好　1992　家族画による少年非行の分析（5）犯罪心理学研究 30　特別号　102-103

（受理年月日　2009 年 1 月 20 日）